読書への誘い（いざな）

河合文化教育研究所 所長　木村 敏

本を読むということには、どんな意味があるのだろうか。それは私たちの心に何をもたらすのだろうか。

たくさん本を読めば確かに知識は増える。また本を読むことによって今まで知らなかった未知の世界を垣間見ることもできる。それはもちろん望ましいことだろう。しかし現在のネット社会の時代には、知識も瞬間的な体験もネットから手軽に得ることができるともいえる。だが、そこから得ることができるような断片的な知識や表層の経験をどれだけ数多く寄せ集めても、人生を豊かにしてくれる「教養」というようなものは身につかない。

教養とは、私たちの心を深く耕すもののことである。ひとまずこう言ってもいいだろう。それを通して、幅広い視野や洞察力、深い思考力が生まれ、そこから私たちは「自分とは何か」、「生きることとは何か」といった根源的な問題を考えることができるようになる。そうすると、この世界のうちに自分一人では存在することができないこと、自己が自己であるためには必ず他者の存在が必要になってくることもわかってくる。生きるとは、世界のうちで、互いに傷つきやすく脆い身体を基盤にしながら、他者とともに存在することである。その自覚のなかから、他者に対する想像力も生まれてくる。そのことが私たちの心をいっそう豊かなものにしていくのである。

では、教養を自分の中で培うには、つまり心を耕すにはどうしたらよいのだろう。それは、良い本を読むことである。良い本とは、ある時代のある場所に生きた書き手が、彼が生きた時代の矛盾に向き合い格闘し、苦しみ考えながら自己の内的必然性に促されるようにして書いた本のことだと言ってもいいだろう。そうして書かれた本を、ゆっくり時間をかけて読む。そうすることによって読者は、いつの間にか書き手が生きている、その人だけの世界に入り込むことになる。本の書き手の生きているこうした世界こそが、一つひとつの知識や情報を、背後から目に見えないかたちでつなぎ、読む者の心に奥行きを与えてくれるような意味を発酵するのである。

ある人が歳月をかけてつくりあげたその人だけの世界に、何日もかけて持続的に住み着き、彼の体験や思考をその内側から自分の中に取り入れるということに

なると、やはり読書以外に手段はない。すぐれた書き手の世界を深く体験することで、読者の心は豊かになり、さまざまな感性が磨かれていく。こうしたことのすべてを教養だといってもいいかもしれない。

＊この「読書への誘い」は、河合文化教育研究所所長だった木村敏先生によって毎号書かれてきたものです。心の病を持つ人と真摯に向き合う中で「臨床の知」を模索して来られた先生は、精神病理学者としての自身の経験から、読書がいかに人に生きる力を与える大切なものかということを深く認識しておられました。その思いから、この『わたしが選んだこの一冊』にも創刊時から熱意をもって関わられ、自ら若い人に向けてこの冒頭の案内を書いてくださった次第です。先生は昨年8月（1931–2021）に亡くなられましたが、今号では在りし日の先生を偲んで、そのご挨拶をそのままここに収録させていただきました。

＊　＊

本冊子について

本冊子『わたしが選んだこの一冊』は、世の中のデジタル化が急激に進む中、多くの若い人々にもう一度読書の意味と楽しさを知ってもらおうということで、河合文化教育研究所が2010年に鋭意刊行を開始した「読書案内」です。執筆者には、河合塾の講師や河合文化教育研究所の主任研究員だけでなく、外部の方々——河合文化教育研究所のシンポジウムや研究会、講演会、出版などに深い問題意識と共感をもって関わっていただいた識者の方々——に参加していただいています。本冊子は、執筆者の方々に自分の人生の中で大きな影響を受けた特別な本を選び出してもらい、それについて短いながら熱い思いを込めて書き綴っていただいた原稿をもとに、新しい「読書案内」として作成したものです。

2010年の創刊号から2021年版まで、これまで12年間にわたって年刊で発行してきましたが、多くの人々が関心を寄せて下さったお蔭で、その発行総数は累計80万部を超えることになりました。いかに多くの人が、読書を人生で必要なものと考え、良い本への道しるべを望んでおられたかにあらためて思い至った次第です。

本冊子は、それなりの使命をまっとうしたのではないかと考え、今回のこの2022年版をもっていったん終刊することになりました。

これまで若い人々の心に届くような豊かで刺激的な原稿をお寄せ下さった多くの執筆者の方々、そしてこれをていねいに読んでくださった多くの読者の方々に、この場をお借りして心からお礼申し上げます。

（河合文化教育研究所）